

5 次元理論

滝沢輝

「5次元理論」

まえがき

5次元は存在するのだろうか？——

「5次元は存在するのかもしれないが、私には到底理解できない」

と考えている人が多いようです。

本当に5次元は存在するのでしょうか。

答えは簡単です。5次元は存在します。しなければならないのです。

では、なぜ5次元が存在しなければならないのでしょうか。それは、5次元を想定しない限り、世界の構造を正しく表現することができないからです。

20世紀までは、4次元で全ての存在を表現できると考えられていましたが、これは正しくありません。5次元を想定しない限り、我々は世界を表現することができないのです。

詳しくは本文に譲りますが、我々はいつも5次元を認識しているのです。ただ、気づいていないだけなのです。

では5次元とは何なのでしょう。これは意識の方向性です。全ての存在を物質ではなく、意識作用として表現する必要があるのです。このときの意識の方向性を、5次元と呼んでいるのです。物質の存在を否定して、意識作用と捉えるのは、大胆な仮説と思われるかもしれませんが、しかし、証明は意外に簡単なのです。物質の存在を否定できれば、これを意識作用に置き換えることは、それほど困難ではありません。5次元は意外に身近なところに存在しているのです。

本書ではこの5次元の存在を証明し、あわせてその考え方、方向性の基礎となる部分を簡単に説明しています。

5次元は21世紀の人類にとって、最も重要な発見になるものと思われれます。ですから一人でも多くの人に、本書を通じて5次元についての理解を深めて頂きたいのです。それが人類の飛躍的な発展につながるものと信じてやみません。

2002年5月

5次元理論 ● 目次

まえがき

5次元の必要性

5次元理論とは

自他分離

意識の方向性・形

意識の回転

自然対数の底「 e 」の物理的な意味合い

虚数単位「 i 」の物理的な意味合い

5次元の更なる理解

大小の逆転理論

物理学の全面改訂

化学の全面改訂

数学の重要性

宗教界への影響

密教の秘密

科学・文化の飛躍的向上による発展

未熟な精神のものは苦勞する

平和の到来

5次元の必要性

著者は、前著「釈迦を超えた日 ～科学宗教の到来」の中で、5次元理論を提唱しましたが、反響は不十分という気がします。記述内容が不足しており、理解が困難だったためかもしれません。

本書では、この5次元にスポットライトを当て、その内容を分かり易く説明しました。本書を読めば誰でも5次元について理解することができるのではないのでしょうか。それ位簡単な記述を心掛けています。

5次元理論のポイントは、意識と科学の融合です。

従来、科学知識は客観性を重要視したため、意識の関与を無視していました。観察を重要視し、見られる側、物の動きを精緻に調べたのです。そしてこの動きを数学を用いて表現し、理論として確立することにより、実生活への応用に成功したのです。

物理学の基礎はニュートンの古典力学からスタートしています。何もないところからスタートしなければならなかったため、物事を非常に単純に割り切りました。

- ・空間は縦・横・高さの3次元から成立する。
- ・その中の物の動きを客観的に観察する。

という2点を大前提にして理論の構築を進めたのです。このように単純化しない限り、複雑な世の中から理論を構築することなど困難だったのです。

その後、アインシュタインの登場により状況は変化しました。相対性理論により、「空間が曲がっている」「重力の要因は空間の歪みである」等の理論を提唱したのです。この理論の登場により、第4番目の理論として、「時間」が導入されました。

4次元までは、一般の人々でも、実生活の感覚で理解することが可能です。時間が過去から未来に向かって流れていることを否定する人はいないはずです。ですから、物理学的次元に「時間」を導入することに対して、特別な抵抗感は無かったものと思われます。

「縦・横・高さ・時間」の4つの次元は、我々の認識を構成する基本的な要素と考えられます。

「4次元の要素は何か」と聞かれた場合、「縦・横・高さ・時間」と正しく回等できる人の割合は、かなり高いのではないのでしょうか。

では、本当に世界は4次元で構成されているのでしょうか。20世紀まで、ほとんどの人々は4次元で世界が構成されていることに疑問を抱きませんでした。逆に「5次元なんて存在するのか」と多くの人々が疑問に思っていたのです。

しかし、物理学の理論には非常に大きな欠陥が潜んでいたのです。それは「見る側」を理論に組み込まなかったことです。客観的に物を観察する、ということに重点を置いたた

め、観察する主体、見る側＝自分を理論に組み込むことを怠ってしまったのです。

「認識は脳で行われている」と、全ての人が無意識のうちに思い込んでいるようです。脳の機能が解明されていないため、これが解明されれば、やがては認識方法も解明されると無条件に思い込んでいるのです。ですから、今まではこの認識という点について、全く考慮がなされていなかったのです。

物理学の成立過程を考えれば、これはある意味でやむをえないことだったと言えます。物理学を学んだ人間からすれば、物理学の基本的な考察過程は、ある意味で簡単かもしれませんが。学校や書物で習っているからです。

しかし、教科書の無い状態からこれを構築する人は大変です。白紙の状態から、物の動きを理論化しなければなりません。ですから、どこから手をつけたらいいのか、皆目見当がつかないのです。従って、世の中を単純な構造として考えるしかなかったのです。

空間を3方向に分類し、その中の認識対象である物の動きを学問の対象とすることにより、この単純化を実現しました。このように単純化しない限り、複雑な物の動きを計算式で表現することは困難だったのです。

物理学が学問として成功した理由は、この単純化にあったのです。現象を「対象物の動き」に限定したため、比較的容易に自然現象を数式で表現することが出来たのです。

「認識対象物の動きは物理学で法則化されており、認識は脳で行われている」

これが20世紀までの常識だったのです。多くの人が、この常識を疑わなかったのです。何故疑わなかったのかは不明ですが、常識観が固定化されており、人々の自由な発想を奪っていたようです。

では、この考え方は正しいのでしょうか。疑ってみると、かなり簡単に結論を導くことができます。

まず、20世紀の常識観を前提にして考えてみましょう。

全ては素粒子等の粒子、物でできているとします。そうすると、人間は肉体という「物」で構成されていることとなります。人間の肉体上で認識を行っているのは「脳」ということとなります。目や神経もありますが、これは、あくまで脳に情報を伝達するための経路にすぎません。

認識が脳で行われているならば、我々の全ての認識は、脳で情報処理が行われた結果です。情報処理が行われる前の状態を経験した人は、人類史上一人もいないこととなります。

ということは、我々の経験は全て脳の中で行われていることとなります。我々は脳の外側に全ての物の存在を認識していますが、実はこれは全て脳の中を見ていることになるのです。

実際の我々の認識状態にあてはめてみましょう。我々は空間の中に、自分という存在を

認識しています。自分は肉体で構成されているわけです。これらの全ては脳の中で情報処理された結果ですから、脳の内部、ということになります。脳という物で認識している以上、認識結果は全て脳に内包されていることになるのです。

ということは、我々が空間と呼んでいる広がりも、全て脳の中、ということになります。我々が宇宙とよんでいる空間も、全て脳の中、ということになってしまうのです。

宇宙が脳の中にあるということは、宇宙大の脳を考えなければならない、ということの意味しています。宇宙というより、脳と呼んだ方が正しいことになります。

ところが、この宇宙の中の、肉体上の頭部に自分の脳は存在しています。ということは、頭の脳と宇宙大の脳、2種類の脳が存在することになってしまうのです。脳は物ですから（前提条件）、2つの脳が存在することはありえません。ということは、矛盾が生じているのです。脳は1つでなければならなかったはずですが。

前提条件は「全ては物でできている」ということでした。だからこそ、肉体の脳で認識せざるを得なかったのです。しかし、矛盾が生じてしまう以上、この前提条件は間違いだと結論するしかありません。ということは、前提条件を訂正するしかありません。要するに、世の中は「物」でできているわけではないのです。

この時点で、従来の4次元的な発想は誤りだと結論づけられてしまうのです。4次元で世界の構造を説明することは不可能なのです。

では、この状況をどのように打開すればよいのでしょうか。それが本書のテーマである「5次元理論」の導入、ということになるのです。

5次元理論とは

世の中は何で構成されているのでしょうか。世界は我々が認識した結果です。認識できる範囲を「世界」と呼んでいるのです。

従来の物理学の4次元の要素である「縦・横・高さ・時間」は、我々の認識状態を説明するために設定されていたのです。はじめに認識が存在しているのです。そして、その認識状態を説明するために、次元が設定されているのです。

しかし、従来の4次元、物から世界が構成されているという考え方では、矛盾が生じてしまうため、新たな次元設定を構築する必要があるのです。その際、

「我々の認識状態を正しく表現する」

ということが、その次元設定の必要条件ということになるのです。

従って、5次元は従来の4次元（縦・横・高さ・時間）に新たな次元を加える、という単純な考え方ではありません。認識処理を前提に次元設定を行うため、従来の4次元的な発想はとりあえず無視して、検討を進めることにします。

認識は主体と客体から成立します。認識する側とされる側です。単純に「見る」という動作を考えた場合、見る人と見られる物、の両者が存在にしなければ、「見る」という動作は成立しません。

従来の物理学、4次元の物理学では、「見る側」を省略して、「見られる側」だけの理論を構築しました。本来は認識の主体と客体の両者を用いて理論を構築すべきところを、客体、即ち「物」のみの理論に単純化してしまったのです。その際、認識主体を脳という部分に固定化してしまったため、認識主体と客体の大きさが異なり、矛盾が生じてしまったのです。

正しくは認識主体と客体の大きさを一致させることです。もし肉体の脳を無視して、脳の大きさと宇宙の大きさが一致していると仮定すれば、何ら矛盾は生じないことになりません。

認識の主体と客体の大きさは常に一致しなければならないのです。我々の認識した結果、認識の客体は宇宙大の空間ですから、認識主体を宇宙の大きさに設定することにより、論理矛盾は解消されることとなります。

我々は宇宙大の認識器官を用いることにより、空間認識を行っていることとなります。当然これは肉体ではありません。ということは、我々は肉体以外の機能を用いて、認識を行っていることとなります。

宇宙大の認識器官を人間が保有しているということは、人間自体が宇宙大の存在であるということの意味しているのです。認識主体は我々の意識ですから、意識自体が宇宙大に

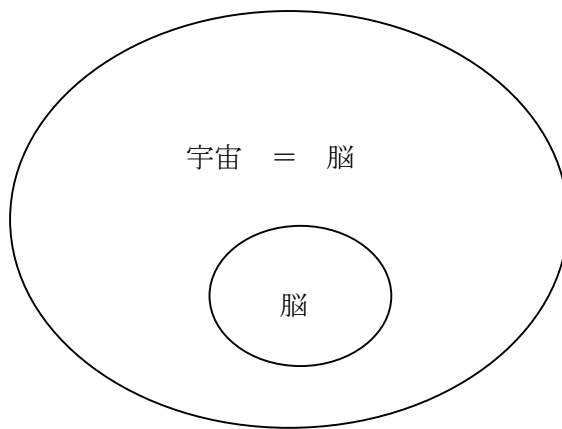
拡大していることとなります。宇宙大の意識が、認識の成立要因ということになるのです。

我々は宇宙の内部で生活しています。従来「物」と呼ばれていた存在は、全て宇宙の内部に存在しています。ということは、「物」とは宇宙大の意識による認識処理結果を意味することとなります。

以上の内容を一言でいえば、
物の「存在」＝「認識処理結果」

ということになるのです。共に「意識の作用」ということとなります。

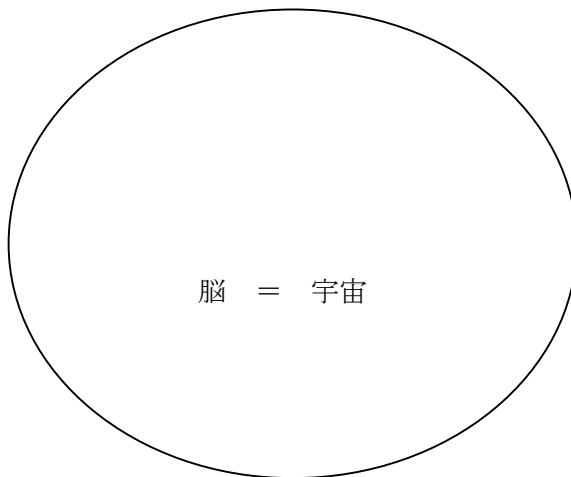
(図1)



脳で認識が行われているならば、我々は生まれてから今まで、脳以外を経験したことがないこととなります。全ての経験は脳内で行われているためです。宇宙と呼ばれる空間も、全て脳内で情報処理が行われた結果です。

ということは、(図1)のように、脳の内部と宇宙の大きさが異なる場合、矛盾が生じることとなります。2つの脳が存在することはありえないのです。脳は1つです。

(図2)



このように、脳内と宇宙は、大きさが一致しなければなりません。情報処理が脳で行われているという前提では、このように考えなければならないのです。

物質の脳が宇宙大に拡大することはありえません。ということは、世界が物質で構成されているという考え方に、矛盾が内包されていることを意味しているのです。物質で構成されている世界では認識することが不可能なのです。

自他分離

まず、認識の原理について考えてみる必要があります。認識とは何なのでしょう。

認識には「認識する者」と「対象物」、が必要になります。単純に表現すれば、自他の2者が必要、ということになります。

我々が認識しているのは全て「他」なのです。自分を認識することはできないのです。試しに自分自身を探してみてください。どこにも自分自身を見つけることはできません。肉体を自分だと思っている人がいるかもしれませんが、そうではありません。肉体のどこに自分がいるかを冷静に考えてみると、どこにも自分を発見することができないのです。

脳も自分自身ではありません。胸も自分自身ではありません。自分の肉体であっても、自分自身ではないのです。冷静に考えれば分かることです。

ですから、認識には必ず自他の分離が必要となるのです。自らの意識を自他の2方向に分離し、一方から他方を認識した結果が、我々の世界、ということになるのです。

尚、自他の2種類の意識は、共に自分自身の意識です。ただ、分離しない限り、認識像を生成することができないため、意識を2種類に分類しているのです。

意識の方向性・形

続いて「意識の方向性」が必要になります。我々は通常、意識を2つの方向に分類することにより、認識像を生成しています。自分に向かう方向と、自分から遠ざかる方向です。この双方向の意識の交点として、我々は認識像を生成しています。世界は双方向の意識上に成立しているのです。

更に、我々の認識形態について考察を進めましょう。我々は空間を広がりとして認識しています。

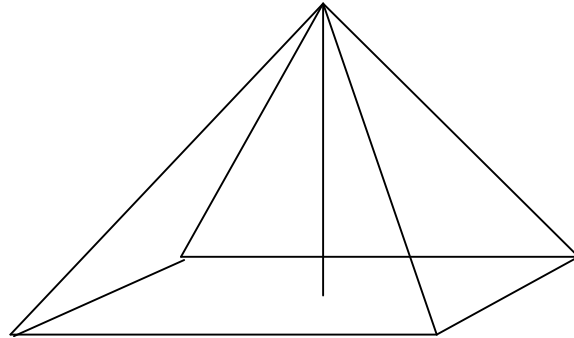
「広い空間に自分がある」

という感覚が、我々の認識の基本形ということになります。広がり感覚は、点と広がりとの組み合わせで成立します。空間認識を生成するためには、自分を点とし、認識対象を広がりとする必要があるのです。自分より認識対象を大とすることにより、大きい空間を認識することができるのです。

そのためには、意識に点と広がりとの組み合わせがなくてはなりません。このような組み合わせ、即ち「形」が意識に内在されていない限り、我々は空間認識を生成することができないのです。

この形は、ピラミッド形のようなものです。ピラミッドの形が意識の基本形のようなものです。

ピラミッドには、点と広がりの方方向性が存在しています。頂点から底辺をみる方向は、頂点を自分とすることにより、底辺を広がりとして認識することができます。逆に、底辺を自分とすると、頂点を点として認識することができます。



(図3) ピラミッド形。意識の形と思われる。高さを1とすれば、底辺は $\pi/2$ となる。

底面から頂点をみれば、点の認識となり、頂点から底面をみれば、広がり認識となる。

空間認識は「広がり」と「点」から生成されています。従来、世界は「素粒子」から生成されている、と考えられていましたが、この考え方は不完全なのです。世界は点だけで生成されているわけではないのです。

我々の世界、認識像は、広がりとのコンビネーションで生成されているのです。このコンビネーションを表現するためにピラミッド形が使用されているのです。

ピラミッドの頂点と底面の中心を結ぶ線を考え、これを「意識軸」と呼ぶことにします。そうすると、意識の方向性とは、この軸上の双方向ということになります。

ピラミッドは不思議な形をしています。底辺が正方形の四角錐形をしています。高さを1とした場合、4底辺の長さの合計が 2π になります。

認識の基本は円形と思われます。我々の認識は円形の組み合わせで成立しているのです。

ピラミッドの高さ1、4底辺の長さ 2π は、ちょうど円の半径と円周と同等の関係になっています。ですから、この形に円形認識の要因が内包されているものと思われます。

ピラミッドの特徴といえば、ピラミッドパワーではないでしょうか。ピラミッドパワー

が存在しているらしいことは、昔から知られているのですが、原理が解明されていません。エネルギーの实在自体が、科学的に確認されているわけではないです。

しかし、意識の形がピラミッド形だとすれば、ここにエネルギーが内在されていることを、必然的に理解することができます。世界の成立要因、次元構成にピラミッド形が関与しているならば、我々の世界にピラミッドパワーが存在していても、不思議ではなくなるのです。

意識の回転

我々の意識は高速回転しているようです。意識軸の周りを回転しているようなのです。

意識が高速回転した結果を、何らかの方法で集約することにより、我々の認識は成立しているのです。その際、意識軸の方向は縮退、短縮化されて、隠れてしまっているようです。現代科学では、この意識の回転結果のことを、

「素粒子の回転である」

と説明していますが、誤った解釈をしているのです。

認識は全て意識の作用ですから、粒子が回転しているのではなく、意識が高速で回転していると考えべきなのです。それ以外に理解しようがないのです。

なお、意識軸自体は直線ではないようです。らせんのような形状をしているようです。ですから、我々の意識は常に曲線になっているのです。曲線状の意識に何らかの変換が加わることにより、直線状の空間認識が成立しているようです。

自然対数の底 e の物理的な意味合い

数学的に、「自然対数の底」と呼ばれている数に「e」があります。

$$\begin{aligned} e &= \lim_{n \rightarrow \infty} (1 + 1/n)^n \quad (n \rightarrow \text{無限大}) \\ &= 2.718 \dots \end{aligned}$$

という数ですが、これが数学や物理学のあらゆる理論に登場します。ですから、自然現象中におけるこの数の重要性は極めて大きいものと思われれます。

しかし、この数が自然現象の中にどのように組み込まれているのか、また、我々の世界になぜ「e」が必要なのか、誰にも説明できなかったのです。しかし、これも「5次元理論」を導入すると、説明することができます。

定義式をみれば分かるように、「e」は（1と無限小）の無限の積、という形で表現されます。1と無限小、という考え方が微妙ですが、一方を広がりから見なせば、もう一方は点と見なすことができるのです。

「5次元理論」では、空間認識、広がり認識を生成するために、「点と広がり」のコンビネーションが欠かせません。点から広がりを見れば、広さを感じることができ、逆に広がりから点を見れば、点を認識することができるのです。

この操作を無限に連続させることが、我々の空間認識の成立要因ということになります。この時の広がりと点が、数学的には「1と無限小」という組み合わせになるのです。これを無限回繰り返すことが、数学的には無限の積、という形式で表現されているのです。

このように考えると、あらゆる存在には、「e」が内包されていることとなります。ですから、自然現象を数学的に表現する際には、「e」が登場するのが当然だったのです。

今までは「e」の意味を理解できないまま、これを科学理論のあらゆる場面に使用してきました。「5次元」導入後は、「e」の本質的な意味を理解できるため、科学理論に対する理解度も格段に向上するのではないのでしょうか。

虚数単位 i の物理的な意味合い

数学に虚数単位 i があります。

$$i \times i = -1$$

と定義される数です。

一般的に理解できる数は実数です。そもそも数の発生は、認識を明確にする点にあったのではないのでしょうか。周辺の状況を理解する上で、「物が一杯ある」では、意味をなしません。従って、1つ、2つ、と数える必要があったものと思われれます。

これが高度に発達して現代の数学理論につながったのでしょう。

ここで、基本になるのは、実数です。数を数える上で使用される数です。2回実数を掛ければ、必ずプラスの値になります。

この実数の対極に位置するのが「虚数」です。2回掛けると、マイナスになる数です。

従来、我々の周囲の空間は全て実数で構成されていると思われていました。ですから、なぜ虚数が物理学や数学で重要視されるのか、理解されていませんでした。

我々の世界には存在しない数なのに、なぜ、使用しなければならないのか。また、各種理論をきれいに表現できるのか。謎に包まれていたのです。

しかし、これも5次元理論を導入すると、理解可能となります。

我々の世界は2意識の作用により成立しています。ですから、これを何らかの数学的な手法で表現しないかぎり、科学理論として「5次元」を確立することはできません。

虚数単位 i は、5次元理論の意識の方向性を数学的に表現したものと思われます。意識には2つの方向性が存在しています。

直線上には2つの方向が存在しています。一方をプラス i 方向とすれば、もう一方はマイナス i 方向ということになります。

$$i \times (-i) = 1$$

ですから、意識の双方向の交点上に、実数は存在することになります。要するに、我々が存在、実在と呼んでいるものは、全て2方向の意識の交点上に存在するわけであり、これは虚数単位を使用することにより、数学的に表現することが可能なのです。

このように「5次元」を理解することにより、虚数単位の物理的な意味を明確にすることができます。従来「存在は実数で表現すればいい」と単純に考えられていましたが、これは誤りだったのです。虚数の乗数として実数を表現するのが正しいのです。これが「5次元」を科学理論に導入するための基本的な考え方、ということになります。

5次元の更なる理解

以上、5次元の具体的な考え方について説明しました。この理解を更に深めましょう。5次元は意識作用による物質、空間の構成理論です。構成要素は点と広がりです。我々の世界は点と広がりから構成されているのです。

では具体的に、5次元を理解した、とはどういう状況を意味するのでしょうか。

まず、無限小の空間を想定して下さい。いわゆる「点」の認識です。すると、この「点」の中には、全宇宙空間が内包されていることになるのです。おわかりでしょうか。

従来、大は小を兼ねるといいますか、大小関係は絶対であり、大きい空間に小さな空間は内包されると考えられていました。逆に、小さい空間に大きな空間が含まれることはありえないと考えられていたのです。しかし5次元理論を導入すると、小さい空間に大きな空間が内包されることになるのです。

空間上のどの点からでも、周囲の空間を認識することができます。これは、

「空間上のどの点も、周囲の空間を内包している」

ということの意味しているのです。内包していなければ、認識することができません。認識できている、ということは、内包していることを意味しているのです。

点に空間が内包されるということは、従来の常識観が完全に崩壊することを意味しています。広い宇宙に存在する小さな人間、という考え方が間違っていた、ということになるのです。大きい、小さいに絶対性など存在しないのですから、宇宙空間の大きさを見て、自らを小さい存在だと考える必要などなくなるのです。

物理学的には、素粒子理論と宇宙論に大変革が訪れることとなります。点に空間が内包されるということは、素粒子に宇宙空間が内包されることを意味するのです。

ということは、素粒子論と宇宙論は、一体の理論として再構築されなければならない、ということになるのです。両極端と考えられていた両理論が、同一の理論として完全に統一されてしまうのです。

物理学の統一理論作成が成功しない最大の要因は、素粒子論と空間の理論に矛盾があり、この両者の統一的な考え方に成功していないためと思われます。その意味において、5次元理論は福音となります。素粒子論と宇宙論の統一は、物理学の統一理論作成における最大の1ステップを生み出すことになるはずで

従来、科学理論における不思議さの中に、フラクタル構造がありました。ある構成物を

想定した場合、その部分と全体が同様の形で構成されていることを、フラクタル、と呼んでいます。

宇宙と素粒子でいえば、円環構造が、同様の構成要素に該当します。原子は原子核と電子で構成されています。その際、電子は原子核の周りを回転している、と考えられています。

太陽系では、太陽の周囲を惑星が回転しています。このように、我々の住んでいる世界というのは、全て回転構造で成立しています。ある種のフラクタル構造で構成されているのです。

5次元理論導入以降の科学界においては、大小関係に絶対性はなくなり、代りに形態等における相関性が重要視されるようになるはずです。そこで重要視されるようになるのが、フラクタル理論等でしょう。

1990年代以降、カオス、フラクタル理論が有名になりました。カオスとは不確実性の理論です。世界の構成要因として、従来の物理学よりも、より我々の世界を正確に表現できるのではないかと考えられたのが、これらの理論が普及した最大の要因です。

5次元理論導入以降においては、このカオス、フラクタル等の理論が世界の構成原理として重要視されるでしょう。世界はこれらの原理を元に構成されているようなのです。

大小の逆転理論

「5次元理論」から導き出される結論として重要なものに、大小の逆転理論があります。大きいものが小さくなり、小さいものが大きくなるのです。

大小の観念、大きいものが小さいものを内包し、逆に小さいものが大きいものを内包することはありえない、とする考え方は、4次元理論までの考え方です。

「5次元理論」では、点に空間が内包されますから、大きさに絶対的な意味は存在しなくなるのです。

認識には2種類の意識が必要です（自他分離の項参照）。この2種類の意識において、認識方法は4種類存在することになります。

自→他、他→自の意識の方向による2種類の認識について、それぞれ小→大、大→小の大小関係による2種類の認識が存在しています。

このように2×2で、合計4通りの認識方法が存在することになるのです。単純化していますが、原則的にはこのような考え方になるはずはです。

認識の基本は、自→他の認識です。我々の周囲の空間は、全てこの意識の方向で認識していると考えることができます。

では、他→自の認識はどうなるのでしょうか。これは、我々の周囲以外の空間として表現されているのではないのでしょうか。

ここで、宇宙や素粒子の大きさを考えてみましょう。物理学等では、指数を用いて大きさを表現します。その際の大きさの割合が、宇宙方向と素粒子方向で、ほぼ同等になっているようなのです。

まず、基準となる大きさを人間自身としましょう。1メートル程度が標準ということになります。

続いて、宇宙空間を考えましょう。太陽系の大きさには定義がありません。どこまでを太陽系というか、決まりはないのです。従って、太陽から最も遠い惑星、冥王星の軌道で考えましょう。直径が約100億キロメートルとなります。これは10の13乗メートル程度の大きさ、ということになります。

宇宙の大きさはどれくらいなのでしょう。大体100億光年程度までが最遠方だと思われまます。1光年が約9兆キロメートル、 9×10 の12乗キロメートルですから、宇宙の最遠方は 9×10 の25乗メートル程度、ということになります。概算で、10の26乗メートル程度が、宇宙の大きさということになります。

ですから、ちょうど太陽系の大きさを2乗した程度の大きさが、宇宙の大きさということになります。

続いて、素粒子の大きさを考えて見ましょう。原子の大きさは大体10のマイナス10乗メートル程度と考えられています。原子の種類によって大きさが異なるようです。この内側の状態は確定できていません。電子の軌道は不確定性原理により、特定不能という結論が現在の科学的結論です。

なお、原子核の大きさは10のマイナス15乗メートル程度、と教科書には書かれているようです。

ここで、これらの大きさを並べてみましょう。

原子	10のマイナス10乗メートル
基準	1メートル
太陽系	10の13乗メートル
宇宙全体	10の26乗メートル

原子の内部は不確定です。特に電子の軌道が曖昧になります。ですから、これを10のマイナス13乗程度と考えることにします。そうすると、この4者はほぼ10の13乗程度の等比関係にあることが分かります。

我々が通常認識している空間は、小さい方で原子レベル、大きい方で太陽系レベルの宇

宙空間ということになります。我々は原子から太陽系レベルの大きさの空間で生活していることになるのです。この大きさの範囲は、人類が顕微鏡やロケット打ち上げにより、存在を確認できているからです。

しかし、原子内の電子軌道は、確定できていません。不確定性原理（物理の理論）により、電子の位置を確定することができないのです。

また、太陽系よりも大きな宇宙空間は、観測することはできるのですが、実在は確認できていません。だれも太陽系の外へ行ったことがないからです。

このように、実在を確認できている認識範囲を、自→他の意識方向による認識結果と考えることにします。

では、それより大きい宇宙空間はどうなるのでしょうか。ここから先は仮説ですが、太陽系より大きな宇宙空間は存在しないと考えています。そこから先の宇宙空間は、錯覚だと思われます。

では、宇宙空間とは何なのでしょう。これは逆方向の認識結果だと考えられます。方向としては、他→自ということになります。

意識の方向が逆転すると、そこで生成される認識像は、大小関係が逆転します。

我々が素粒子、点と認識している存在は、自→他方向の認識において、自が大きく、他が小さい場合の認識結果です。方向が逆転して 他→自方向の認識になれば、他が小さく、自が大きいのですから、広がり、空間としての認識になります。

このように意識の方向が逆転すると、大きさが逆転します。このように考えると、我々の周囲にある全ての存在は、大小関係を逆転させた存在として、宇宙空間に存在していることになります。

細胞や分子や原子、素粒子等の小さな空間認識を逆転させた結果として、太陽系外の宇宙空間は存在しているのではないのでしょうか。つまり、2方向の意識による認識処理の結果として、全ての存在は2重に映し出されていると考えられるのです。

現段階では仮説の領域を出ませんが、このように考えないと、両意識による認識結果を適切に説明することができません。また、宇宙や原子のサイズが、ちょうどこの仮説を裏づけていることになるのです。

また、全ての存在は意識作用の結果ですから、無限大とも思える100億光年にも及ぶ宇宙空間を想定することには合理性がありません。それよりも、我々の住んでいる世界、太陽系程度の大きさを実在とした方が、より合理的です。

このように考えると、いろいろ面白い仮説を立てることができます。星座を考えてみましょう。星の配置と地上の建築物の配置に相関性があることが確認されています。一番有名なのは、エジプトのピラミッドでしょう。オリオン座の中央部の三ツ星とギザの3大ピラミッドは、配置や明るさが完全に一致しているように見えます。

今まで、この相関性は、星の配置を真似してピラミッドが建築された結果と考えられて

きましたが、これは間違いではではないでしょうか。

「大小の逆転理論」から、オリオン座はピラミッドそのものが、宇宙空間に映し出された結果だと推察することができます。だからこそ、配列や明るさに相関があるものと思われれます。ピラミッドはピラミッドパワーと呼ばれるエネルギーに満ち溢れています。これがオリオン座の光の源なのではないでしょうか。

星座と呼ばれるものも、同様の原理によるのではないのでしょうか。何らかの身近な構成物が、「大小の逆転理論」により、宇宙空間に映しだされているものと考えられます。

この理論の証明には時間がかかるかもしれません。星座や星と、その構成要素と思われる建築物の関連をまず調べる必要があるでしょう。その上で、この建築物の破壊等による損傷と、星の成行きを見守る必要があるのかもしれない。

いずれにしても現段階では仮説です。「5次元理論」が一般に浸透した段階で、検討すべき課題だと思われれます。

物理学の全面改訂

5次元理論では、従来「物」の理論即ち認識客体の理論であった物理学を、自・他の両者から成立する理論に変更しなければなりません。「物」のみでも複雑であった「物理学」の理論が、主体と客体の両者の相関から成立する理論に変更されるため、複雑さは、従来の比ではなくなります。従来の理論よりもはるかに複雑になるのです。

4次元までの物理学では、空間を見るままに「縦・横・高さ」とし、更に「時間」を導入して理論を構成しました。「認識客体」、「物」の理論としての物理学はその程度の次元設定で、一応十分に機能していたものと思われれます。

しかし、5次元導入後には「認識主体・客体間」の相関として、空間・時間等の従来の物理学的次元を定義しなければならないため、次元設定は、従来よりも複雑になります。理論自体が従来よりも複雑になるものと思われれます。物理学の理論を全面的に改定しなければなりません。

本書では、その詳細な次元設定については、検討していません。著者自身が気づいた内容について説明しているだけです。ただ、今後発生すると思われる、科学理論全体の改定作業を事前に予告しているのです。そして、科学者全体に5次元の存在を理解して欲しいのです。それが、21世紀の人類にとって必要だからです。

なお、本書では、新たな次元設定をまとめて「5次元」という呼び方をしていますが、実際にはそれほど単純なものではありません。かなり複雑な理論になるものと思われれますが、適当な言葉が見当たらないため、とりあえず「5次元」という言葉を使っているの

す。

化学の全面改訂

物理学が全面改訂になるとすれば、化学も当然改定されることとなります。物は原子からなり、原子は原子核と電子からなる、という説明が学校の教科書で行われていますが、これらは全て物理学の理論が前提になっています。物理学の理論が改定されれば、当然、これらの化学の内容も改定されることとなります。

そもそも電子など存在しなのです。「不確定性原理」において「測定不能」という結論が出ているにも関わらず、これを粒子として教科書で教えること自体が間違いなのです。「5次元理論」で、物理学の矛盾が鮮明になるにつれて、化学の教科書等も、全面的に書き換わることになるでしょう。

数学の重要性

数学の重要性を認識している人は極めて少数派と思われます。例えば、学校教育で重要視される関数について

「関数なんて知らなくても、実際の生活には不自由しない。何で覚えなければならないのか」

という意見の人が多いのではないのでしょうか。

我々の世界が「意識の作用で成立している」という「5次元理論」の考え方では、意識の作用形態自体が、複雑な世界の成立要因ということになります。この作用形態を規定しているのは、数学的な論法であると思われます。従って、21世紀は、数学が極めて重要視される時代になるものと思われます。

数学は物理学の理論を表現するための手段として使われてきました。実際、物理学の講義は、数学の講義のごとく、数式の羅列です。しかし、「5次元理論」の登場で、物の存在がなくなり、意識の作用だけになると、敢えて「物理学」という名称を使う必要などなくなるはずで

この段階において、数学的な論理思考形態が、物理学の代りとして、世界の構造原理を研究する学問としての立場を確立するものと思われます。

宗教界への影響

「5次元」の発見は、人類全体に多大な影響を与えることとなります。莫大な影響を与え

るでしょう。当然、宗教界にも影響を与えるはずです。

日本の新宗教では、その教義を分かり易くするために、科学理論を取り入れているため、「5次元」導入後は、これらの教義にも修正が必要となります。

たとえば、「波動で全ての物は構成されている」等の考え方が、日本の新宗教の教義に取り入れられていますが、ここに修正が必要となるのです。

波動理論は、物理学の「物と波動の2面性」から、宗教家が自らの立場を強化するために取り入れた論法だと思われます。

「物と波動の2面性」とは、全ての素粒子には、粒子と波動の2面性が存在する、という理論です。全て粒子としての側面と、波動としての2側面を兼ね備えているのです。これは、見方によっては、すべては粒子、即ち物質から構成されている、と考えることができる反面、全ては波動、即ち波から構成されている、と考えることもできる、という理論です。

仏教国である日本では、その中心的な思想である「空」の理論を科学的に説明する方法として、この波動理論を取り入れたのです。

「全ては波から構成されている。物質は存在しないのである。これは科学的にも正しい結論である」

という論法を使用していたのです。

しかし、この考え方では不完全です。波、とは一体何なのでしょう。この点を質問されても、回答できる宗教家、科学者はいませんでした。従来の物質中心観が、波動中心観に変更されただけです。ですから、この程度の理解では、宗教的な悟り、空の境地に至ることは不可能だったのです。

現に、日本では様々な宗教が信仰されていますが、悟りを開いた、と呼べる程のレベルに到達している人は、20世紀末時点では、ほとんどいなかったのです。

「5次元理論」の登場は、宗教理論の向上を、そのまま意味しています。波動の代りに「意識の高速回転」という理解に変更されるためです。全ての存在を「意識による認識処理の結果」と見なすため、全ての存在を「自分自身の意識作用」と実感することができるようになります。

従来の波動理論では、自分自身とは別の何らかの「波」が、世界の構成要因のように考えられていたため、周囲の空間、物質と自分自身がどうしても解離しているように感じられていたのです。

しかし、全てを自分自身の意識作用として理解することにより、自他の分離観がなくなり、全てを自分自身の現われ、自分自身の意識作用として理解することができるようになるのです。特別な修行を積まなくても、理論的に、そのような理解に帰結してしまうのです。

このようにして、誰もが仏教の「空」の境地を容易に理解できるようになるのです。

また、従来の宗教は観念的であり、個々の現象を科学理論のように、明確に指摘することができませんでした。しかし、5次元理論導入以降、科学理論自体が意識作用に変換されるため、抽象的な宗教理論の代りに、世の中の様々な現象、各種作用を説明する役割を担うはずです。

この段階に到ると、抽象的な宗教の役割・影響力は限定的なものとなるでしょう。宗教と考えられていた内容が、全て一般常識化されるわけですから、宗教のありがたみ、といったものが、薄れてしまうためです。

宗教の代りに、科学者等、各種研究者の研究内容が、20世紀迄と比べて、数段高度化されるはずです。例えば医学においては、意識、精神のあり方と病気に相関関係のあることが、多くの人々に理解されていましたが、理論化されていませんでした。基本的な考え方が全く存在しなかったためです。「神経性胃炎」という病名はありますが、なぜ精神が肉体に影響を及ぼすのか、根拠は不明確なままでした。

しかし、「5次元理論」導入以降の社会においては、全ては意識作用として説明されるわけですから、必然的に、病気と意識の相関関係が研究テーマにならざるをえなくなるのです。

残念ながら、現代の宗教理論では、意識の歪みにより病気が発生する点を指摘することまではできるのですが、それ以上の詳しい説明をできる人はいません。どのような意識のあり方、行動様式が肉体のどの部分にどのような影響を与えるかまでは、理解できていないのです。

ここが、現代の宗教の限界点ということになるでしょう。更に詳細な理解は、専門の研究者による研究領域になるはずです。ということは、このような意識と病気のあり方についても、宗教の影響力は一步後退し、代りに最新の医学、5次元導入後の医学がその役割を担うことになるはずです。

ただし、魂の救済になると、話は別です。科学と宗教が融合されたとしても、それがそのまま魂の救済に直結するとは思えません。全ての人々は天界から放射された意識、光です。ですから常に天に意識を向けています。天に憧れているのです。この感情は決して消えることはありません。

この感情、熱情を宗教と呼ぶならば、宗教はやはり永遠でしょう。5次元理論到来以降の社会においても、決して宗教がその立場を失うことはありえないと思えます。

「5次元理論」構築により、全ての存在が意識の現われとして証明されるはずです。この段階において、人類は自らを更なる高みへと進化、向上させるのではないのでしょうか。そのための理論武装は完了しているわけですから、更なる向上を開始するはずです。それが21世紀、人類の最大の目標ということになるでしょう。

密教の秘密

密教のマンダラには、世界の構造原理が端的に表現されているようです。

マンダラには、金剛界曼荼羅と胎藏界曼荼羅の2種類が存在しています。このうち、金剛界曼荼羅に、宇宙の構造原理が表現されているようです。

マンダラをみると、部分に全体が表現されています。これは、小さい部分と大きい部分が、同等の構造をしていることを意味しているのです。

この考え方は、いわゆるフラクタルと同様の考え方です。フラクタルとは、部分と全体が同様の形をしている構造です。ですから、マンダラの製作者は、フラクタルという考え方が登場する数千年前に、フラクタルを発見していたこととなります。まさに驚くべきことです。

「5次元理論」も、ある種のフラクタル構造を意味しています。部分に全体が内包されるためです。点に空間が内包されているのです。ですから、「5次元理論」レベルの内容を、マンダラの製作者は理解していたこととなります。

仏教の創始者は釈迦であるため、仏教界の最高指導者は釈迦だと思われていますが、これらの状況を踏まえると、釈迦よりも密教の創始者の方が、高い境地に到達していたものと推察できます。

釈迦は空の境地を唱えたのかもしれませんが、世界の構造原理には言及していません。言及しなかったというより、言及できなかったという方が正しいのではないのでしょうか。要するに、構造原理を理解していなかったものと思われるのです。

一方、密教の創始者は、世界の構造原理を、直感的に把握していたものと推察できるのです。ということは、釈迦よりも、密教の創始者の方が、より高い悟りの境地に到達していたと判断せざるをえないのです。

釈迦は仏教の開祖としては偉大ですが、何も釈迦が仏教界で最高、というわけではないようです。価値観を固定的にしてしまうと、判断を誤ってしまうことがあるということです。

科学・文化の飛躍的向上による発展

5次元理論の登場により、人類はあらゆる面で飛躍的に発展することになるでしょう。物質も我々の意識作用になるわけですから、その根本原理を理解することにより、生成することが可能となるはずですが、物質を自在に生成できるわけですから、人類は従来よりも自由自在に活動するようになるでしょう。

20世紀までの物質信仰が崩壊し、自らの意識で全てを生み出すこととなりますから、自由自在に活動することが可能となるのです。

社会や国家のあり方も変更されるでしょう。20世紀までは一定量の物を奪い合いながら

国家や社会が構築されていましたが、5次元理論確立後は、与え合うことが基本となるはずです。その方が、豊かになることが証明されるためです。

また、物の生成、変更も可能となるはずですから、物に執着する必要がなくなります。その意味においても、人々は精神的により豊かな生活を営むことが可能となるのです。

環境問題も、自然に解消されるでしょう。「5次元理論」の登場は、必ずそのような結論に達するからです。自分自身が周囲の環境に与える影響が、必ず自分自身に反射されることが、理論的に証明されるためです。

「与える」ことが基本になります。自らの創造活動、社会活動において生み出した価値を互いに提供しあうことにより、物心共に豊かな社会を構築することが可能となるのです。また、豊かな文化を育むことが可能となるのです。

与えることは、与えられることを意味します。提供する人には、必要な物や知恵が提供されるのです。これが一般の人々の常識になりますから、与え合う社会が必然的に到来することになるのです。

我々が生きる目的は、自ら活動した成果を社会に提供することです。互いに提供しあうことにより、より豊かな生活を実現することが可能になるからです。精神性が向上した人々の社会では、このような行動形態が常識になるのです。従って21世紀は人々が互いの生産物、成果物を提供しあう社会にならざるを得ないのです。

未熟な精神のものは苦勞する

「5次元理論」の登場により、精神、意識の重要性が社会的常識として確立されると、苦勞するのはこの変化についていけない未熟な精神の人々、ということになると思われます。

例えば「肉食」もその一例に上げられます。現在では肉は食品として一般社会に通用していますが、これも「5次元理論」確立後の社会においては、食品と見なされなくなるはずです。

肉にもいろいろな種類がありますが、哺乳類は食品として成立していないようなのです。感覚的に判断できるのですが、非常に歪んだ雰囲気を内包しています。

哺乳類はもともと食べられるために存在しているわけではないようです。従って、食べられるために殺されることを極度に嫌がっているようなのです。この苦しみ、恨みのような意識が、哺乳類の肉に内包されているのです。全ての存在は意識の作用です。動物の意識も動物の肉に付着しているのです。この肉を食べると、その歪んだ意識を自らの体内に蓄積してしまうのです。

筋肉トレーニングの専門家などは、豚肉や牛肉をさげ、鶏肉を推奨しているようです。確かに、鶏肉や魚には、哺乳類のような歪んだ成分は含まれていないようです。ですから、肉といっても、種類によっては食品として成立したり、しなかったりするのです。

一般の人々の意識が高度化する段階、「5次元理論」以降の科学理論が発展する段階において、これらの悪成分の存在が証明されるはずですが、証明されてしまえば、肉は食品ではない、もしくは体に悪い食品、いわゆるタバコのような存在になるわけです。

となれば、普通の意識の人々は、これを食べなくなります。豚肉や牛肉を食べるのは、異常な行為、ということになります。昔から宗教家が肉を食べなかったのは、極めて道理にかなっていたのです。

肉から体内に蓄積していた、歪んだ意識の成分を摂取することがなくなるため、人々の精神は今よりもかなり穏やかになるはずですが、肉食は、人類の意識を歪めるという理由で、非常に大きなマイナス要因だったのです。

しかし、肉が大好きな人々は肉食を続けるのではないのでしょうか。理論的に体や精神に悪い、と証明されたとしても、食べたい、という欲求には打ち勝てないからです。ただ、食肉派は少数派に転落しますから、人々から段々疎んじられる存在になるのではないのでしょうか。

「あの人、肉が好きなんですって」などという陰口がたたかれる日も、それほど遠い未来ではないのかもしれませんが。

また、「5次元理論」以降の社会においては、自分自身の意識が肉体に与える影響についても、各種の理論が確立されるはずですが、こうなると、「何を考えるのも自分の勝手」という現代の常識が通用しなくなります。何かを考えることは、自分自身の肉体に影響を与えることになるからです。ということは、常に人は自分自身の思い、想念を管理しなければならないことになります。それが自分自身の肉体に影響を与えてしまうからです。

しかし、想念管理は、かなり困難なものです。誰にでも簡単にできるものではありません。人格高潔な人々は、日頃から想念を管理しているため、それほど苦勞は感じないでしょう。しかし、そうではない人々は、想念管理に苦勞することになります。

「想念管理しないと自分自身に悪影響がある、しかし管理できない」という状況に陥ってしまうのです。想念管理には確かに時間がかかります。ですから、21世紀における想念管理の重要性に気づいた人々は、今のうちに自分自身の想念を管理する努力を開始しなければなりません。そうしなければ、結局自分自身が苦勞してしまうのです。

本書を出版する理由の1つもここにあるのです。多くの人々に来るべき時代の様相を伝え、そのための事前準備をしていただきたいのです。想念管理はその上で極めて重要な1要素ということになります。

平和の到来

「5次元理論」は、科学理論であると同時に、宗教理論でもあります。従って、宗教理論が科学的な根拠をもって成立することになるのです。

世界的な紛争、戦争は、思想や宗教の対立に根ざす部分が非常に多いわけですが、科学に裏打ちされた宗教理論が登場すれば、世界中のあらゆる人々がこれをスタンダードな宗教理論として受け入れることになるはずです。

単なる信仰ではなく、科学的に立証されるわけですから、標準的な宗教理論としての立場を確立することになります。

現在、世界の宗教には共通する理論、理念が存在しません。従ってどうしても宗教は信仰中心主義に陥ってしまうのです。こうなると信仰する宗教の違いにより、分離感、対立感が生じてしまうのです。宗教の教えには必ず何らかの相違点が存在するためです。

科学理論に根ざした宗教理論が登場すれば、世界中の人々が、自ら信仰する宗教の他に、この宗教理論を受け入れるはずです。そうすれば、世界中の宗教、信仰に共通に理解が生まれるため、宗教的な対立感が解消されるはずです。

これは同時に民族間の対立感情も減少させるはずです。このように、宗教に共通の理解が発生することにより、世界中の対立感が減少することになるのです。

また、「5次元理論」は精神のあり方と環境、境遇の相関関係を説明するはずです。そうなると、人々は自らの精神の調和・安定に努めるようになるはずです。このように、人々は無駄な争いごとを極度に嫌うようになるはずです。

戦争など余りに無意味で、誰も興味を示さなくなるはずです。このように、「5次元理論」の普及により、世界は平和へ向かうのです。

世界平和を実現するためにも、この理論の確立を急ぐ必要があるのです。

滝沢 輝 (たきざわあきら) の経歴・活動実績

- 1985年 宗教家としての活動を開始。
- 1989年 東京大学工学部卒業、三井銀行（現三井住友銀行） 入行
- 1994年度 「これから情報通信革命が起こる。パソコンが銀行になる。システムを戦略部門にすべきである。」 と（さくら）銀行に提言。この後、さくら銀行は日本初のインターネット専門銀行（ジャパンネット銀行）を設立する等、I T戦略で銀行業界のトップを独走。この動きが各産業界へのI T導入や日本のI T戦略へつながった。
上記提言が日本のI T戦略の原動力になったのである
- 1995年6月 総合企画部配属。ALM 担当。
- 1999年7月 霊位が釈迦、イエスを超える。
- 2000年6月 5次元等研究のため、退社。
- 2000年12月31日 ピラミッド形（万物の創造原理、かつ磁界エネルギー（人の活動エネルギー）生成装置を天より授かる。
イエスの再臨である。
- 2001年9月 「釈迦を超えた日」を出版。5次元を提唱。
- 2003年2月 「5次元理論」（本書）を出版。世界がフラクタル構造（点に空間が内包されている構造）であることを理論的に解説。5次元導入による物理学の全面的な改定作業の必要性を提言。本書の出版が人工知能の大幅なレベルアップにつながった。ディープラーニングは本書が提言したフラクタル構造の応用である。
- 2003年6月 「マイナス金利の導入」を著述。
世界で最初にマイナス金利の導入を提言したのは本書である。
本書が世界のマイナス金利の原点である。
その結果、2014年にヨーロッパでマイナス金利が導入された。
また、日銀は2016年にマイナス金利を採用した。
本書では日本経済再生のため、経済の新理論を発表。名目経済成長率と金利水準が一致すべきであることを理論的に解説。1990年代以降の不景気の原因が、高すぎた金利水準であることを同時に証明。金利水準と名目経済成長率の関係を逆転させることにより景気・財政の回復を図るべきだと主張。
本書を政府・日銀等に送付後、金利を下げるべきとの認識が国内に広まり、景気回復・失業率低下の原動力となる。
アベノミクスの骨子である低金利高経済成長率政策は、「マイナス金利の導入」の無断コピーである。
- 2004年1月 フラクタル構造に電磁波を蓄える性質があることが確認される（朝日新聞の1面に掲載）。
「5次元理論」の内容の一部が学術的に確認されたことになる。
- 2005年 「5次元理論」の続編の執筆を開始。基本構造について、日本物理学界等へ送付。
- 2005年 天界入りを果たす。（天界は守護神霊（各種宗教の本尊クラス）の世界）
- 2006年11月 「5次元理論 ～その2」を著述。日本物理学会等へ送付。
- 2007年 「貨幣へのオプション概念の導入」「外国為替理論の再構築」を著述。各方面へ送付。
- 2008年6月 人類救済のため、「輝の会」設立。「人類救済の基本原理」を発表。
- 2009年8月 「フラクタル経済理論」を著述。バブル発生理由の理論的解明に成功。
- 2009年10月 「5次元理論 第3巻 認識の原理」を著述。5次元のアウトラインを解説。
- 2011年10月 「5次元理論 第4巻 宇宙の創造原理」を発表。
- 2011年11月 創造神界入りを果たす。
- 2011年12月 「長寿サービス」をスタート。人類の長寿化開始。キリスト教の千年王国の実現である。
- 2011年12月 「磁界エネルギー（オーラ）発生装置」を発表。磁界エネルギー（オーラ）を機械的に生成することに成功。
- 2012年2月 「5次元理論 第4巻 宇宙の創造原理」を日本物理学界へ送付。

2012年7月 野田首相に「原子力発電全廃は必須」というタイトルの提言を実施。その結果、2012年9月14日に「2030年代に原発稼働ゼロ」を目指す新しいエネルギー政策「革新的エネルギー・環境戦略」が政府から発表された。
本提言が、日本の原子力政策を正しい方向に導いたのである。

2012年11月 「フラクタル経済理論 第2巻」を発表。貨幣制度廃止の必要性を解説。その実現のために貨幣保有期間上限設定政策を提言。

2012年12月 全世界の人々に 就業可能日数 の提供を開始。
その結果、失業率が大きく改善した。

2013年7月 台風消去サービス提供開始。

2013年11月 金運サービス提供開始。金運生成方法等を公開。

2014年2月 生まれ変わり に関する解説文記載開始。

2014年3月 ご祈願 提供開始。

2014年9月 先祖金運サービス提供開始。

2014年10月 エボラ出血熱消去に成功。3868人の命を救済した。

2015年6月 喜びオーラ 提供開始。

2016年7月 序列運 提供開始。

2017年2月 序列運診断 提供開始。

2017年8月 愛され運 提供開始。

2018年3月 愛され運診断 提供開始。

現在 輝の会会長

ホームページ <http://taki-zawa.net> （「輝の会」で検索して下さい）

メール info@taki-zawa.net

Copyright ©Akira Takizawa all rights reserved.